

大和都市計画事業大和小泉駅前地区土地区画整理事業に伴う

神ノ木遺跡

発掘調査概報

(付. 神ノ木塚発掘調査概要)

1994. 3

大和郡山市教育委員会

大和都市計画事業大和小泉駅前地区土地区画整理事業に伴う

神ノ木遺跡

発掘調査概報

(付. 神ノ木塚発掘調査概要)

1994. 3

大和郡山市教育委員会

例 言

1. 本書は、大和郡山市小林町277-1において実施した発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は大和郡山市都市計画事業大和小泉駅土地区画整理事業に伴う道路敷設事業（大和中央道）を契機として実施した。
3. 調査期間、および調査面積は以下の通りである。

【調査期間】

〔試掘調査〕 平成5年6月3日～18日

〔本調査〕 平成5年6月21日～8月18日（神ノ木遺跡）

平成5年9月9日～10月6日（神ノ木塚）

【調査面積】 約500㎡（神ノ木遺跡）

約80㎡（神ノ木塚）

4. 調査は、以下の組織で実施した。

【現地調査】

〔調査員〕 山川均（大和郡山市教育委員会）

〔補助員〕 本村充保、旗禮友紀、大井理恵、山口直子（以上奈良大学）

武田浩子

〔作業員〕 堀川正治、米田利男、岸田勝信、谷淵喜一、喜多美寿子、米田都子、藤川ミツエ、

杉岡雪子、杉岡克子

【事務】

大和都市計画事業大和小泉駅前地区土地区画整理事業事務所

5. 本書は、以下の分担で作成した。

〔製図〕 佐藤亜聖（奈良大学）、武田、本村

〔執筆〕 V章 久野雄一郎、他は山川

〔編集〕 山川

6. 本書作成に際しては、三宝伸鋼工業株式会社相談役 久野雄一郎氏より、鉍滓の化学分析に関する玉稿をいただきました。また、現地調査ならびに本書の作成に関しては、下記の方々より貴重なご教示、ご指導を賜りました。記して感謝致します。

奈良県立橿原考古学研究所 中井一夫氏

同 佐々木好直氏

同 橋本裕行氏

同 入倉徳裕氏

本文目次

I	はじめに	
1	調査の契機および経過	1
2	調査地の環境	1
II	神ノ木遺跡の調査概要	
1	層序	3
2	遺構	3
3	遺物	9
4	小結	11
III	神ノ木塚の調査概要	
1	調査の事前経過について	12
2	遺構	14
3	遺物	14
4	小結	16
IV	まとめ	17
V	神ノ木遺跡出土資料の金属学的調査	
1	はじめに	18
2	外観・重さ	18
3	成分分析	20
4	組織	20
5	まとめ	20

図表目次

図1	大和郡山市の位置		図8	落ち込み-02縦断土層断面図	6
図2	調査地点位置図	1	図9	落ち込み-02横断土層断面図	6
図3	周辺遺跡およびトレンチ配置図	2	図10	SX-01平面図	7
図4	基本土層柱状図	3	図11	SX-01土層断面図	8
図5	検出遺構平面図	4	図12	SX-01出土遺物実測図	10
図6	SK-01平面図	5	図13	その他の遺構出土遺物実測図	10
図7	落ち込み-01平面図		図14	神ノ木塚調査前平面図	12
	および土層断面図	5	図15	神ノ木塚検出遺構平面図	13

図16 神ノ木塚土層断面図	14	表2 金属質の分析結果	20
図17 神ノ木塚出土遺物実測図	15	表3 神ノ木遺跡出土遺物観察表	23
表1 各試料の成分分析結果1	19	表4 神ノ木塚出土遺物観察表	24

写 真 ・ 図 版 目 次

写真1 試料1	21	写真8 試料8	21
写真2 試料2	21	写真9 試料9	22
写真3 試料3	21	写真10 試料10	22
写真4 試料4	21	写真11 試料7 ガラス質の部分	22
写真5 試料5	21	写真12 試料8 ガラス質の部分	22
写真6 試料6	21	写真13 試料7 組成像 (×400)	22
写真7 試料7	21	写真14 試料8 組成像 (×400)	22
図版1 調査地空中写真			
図版2 1. 調査地全景		2. 同上	
図版3 1. 落ち込み-01 遺物出土状況		2. SK-01 遺物出土状況	
図版4 1. SX-01 全景		2. 同上	
図版5 1. SX-01 部分		2. 同上	
図版6 1. 調査前の状況		2. 表土除去後の状況	
図版7 1. 塚本体断ち割り状況		2. 調査風景	
図版8 1. 南北土層		2. 東西土層	
図版9 神ノ木遺跡 遺物			
図版10 神ノ木塚 遺物			
図版11 神ノ木塚 遺物			
図版12 神ノ木塚 遺物			

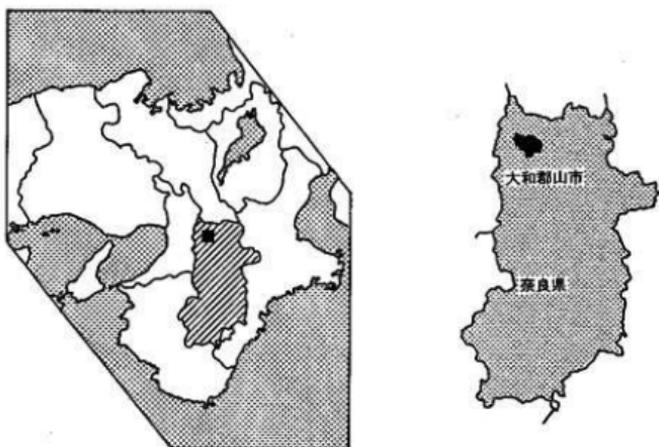


図1 大和郡山市の位置

I はじめに

1 調査の契機および経過

今回の調査は、大和都市計画事業大和小泉駅土地区画整理事業地内における、道路敷設作業（以下、「事業」と略する）に伴うものである。調査に際しては、事情によりまず調査対象地北端に存在する、通称「神ノ木塚」部位と、以南の部位に分けて実施することとなった（図3参照）。本書においては、便宜上、この両者を「神ノ木塚」と「神ノ木遺跡」に分けて報告を行いたい。このうち神ノ木遺跡の調査は、試掘調査が平成5年6月3日～18日にかけて行われ、その結果地下遺構等の存在を確認したので、同年6月21日～8月18日にかけて本調査を実施したものである。また、神ノ木塚に関しては、もとより地上に表徴のあったものなので、試掘調査を経ずに同年9月9日より調査を開始し、10月6日に現地作業を終了した。なお、ここでは調査に際して前例の無い経過を辿った部分もあるので、それについてはIII章で触れることとした。

2 調査地の環境

調査地は、現在は市内の平野部西端付近を南北に貫流する富雄川（かつては現在の流路の東方を鳥趾状に溯流していたと考えられる）の旧流路が形成した緩傾斜扇状地上に立地する（図2参照）。



図2 調査地点位置図 (S:1/50,000)



図3 周辺遺跡およびトレンチ配置位図 (S:1/5,000)

微地形的にはベースとなる明黄色粘土、もしくはシルト層が北から南へ緩やかに傾斜するもので、若干の周辺の調査事例を勘案すれば、現在の国道25号線付近に埋没谷の存在が予想される。

なお、周辺の調査では、図3に表示した「高月遺跡」において7世紀第2四半期の独立柱建物10棟が検出されている³⁾ほか、同図中の「来光遺跡」では細長い土坑状の遺構から、土器と共に平瓦が出土している。時期は、やはり7世紀第2四半期である³⁾。こうした事例を勘案すれば、今回の調査地の周辺においては、現在までのところ寺院や官衙等の中心的な遺跡は未発見であるが、何らかの重要遺跡が周辺に存在する可能性はきわめて高いものと思われる。なお、北の横大路（いわゆる龍田道）は、現在調査地の南を東西に走る国道25号線とほぼ重複していると考えられており、また筋違道（いわゆる太子道）と呼ばれる斜行する道路痕跡も、本調査地に隣接する位置を通る。つまりこのあたりは古代交通上、きわめて重要な位置を占めていることも特記されよう。なお、今回の調査地の国道を隔てた南側には「今国府町」の地名が残っており、ここを大和国府とする説も古くからあることもまた³⁾、このあたりを知るうえで付記しておかねばならないだろう。

II 神ノ木遺跡の調査概要

1 層序 (図4)

今回の調査地は、ベースが北から南へ緩やかに傾斜するため、トレンチ北と南では層序がやや異なる。ここでは南側の土層より説明する (図4-左)。後の遺構の説明とも関わるが、この地が耕作地となるのは、出土遺物より見て9世紀後葉～末葉にかけてであり、同図⑥層が該期の堆積層である。これには耕作関連遺構 (図5に示すような、調査地南端付近のいわゆる「素掘小溝」) が伴うので、それが耕作によって形成された層であることは明らかである。なお、これはより上の層に關しても同様と思われる。図4-左と同右が対応するのは両図におけるそれぞれ②層と⑦層で、この時期に北辺部分 (やや小高い部分=微高地) も耕作地化されたものと思われる。その具体的な時期は、出土遺物が陶磁器類等の僅かな小片に限られるため判然とはしないが、おそらくは近世期のある時点、溜池灌漑の恩恵によって耕化がなされたものであろう。

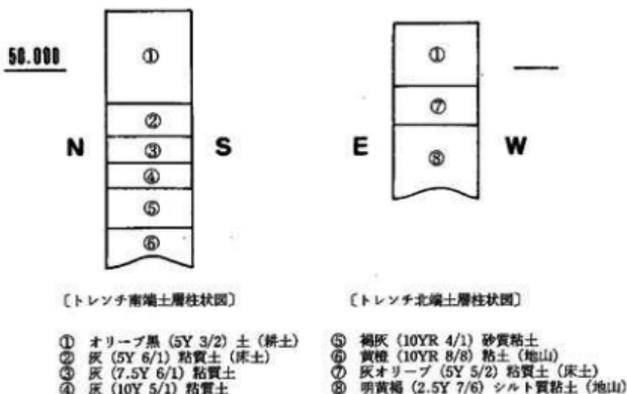


図4 基本土層柱状図 (S:1/20)

2 遺構 (図5)

今回検出された主要な遺構には、6世紀初頭～9世紀後葉までのものがある。以下、時期順にそれらの概要について記述する。

SD-01

浅い溝状の遺構である。幅は2.5～3.5m、深さは約35cmを測る。なお、遺構そのものは人為的に埋め戻された状況であった。時期(埋没時期)は、埋土中の土器より判断して5世紀末葉～6世紀初頭と考えられる。遺構の性格については不明だが、後述の落ち込み-01および同02等と関係する遺

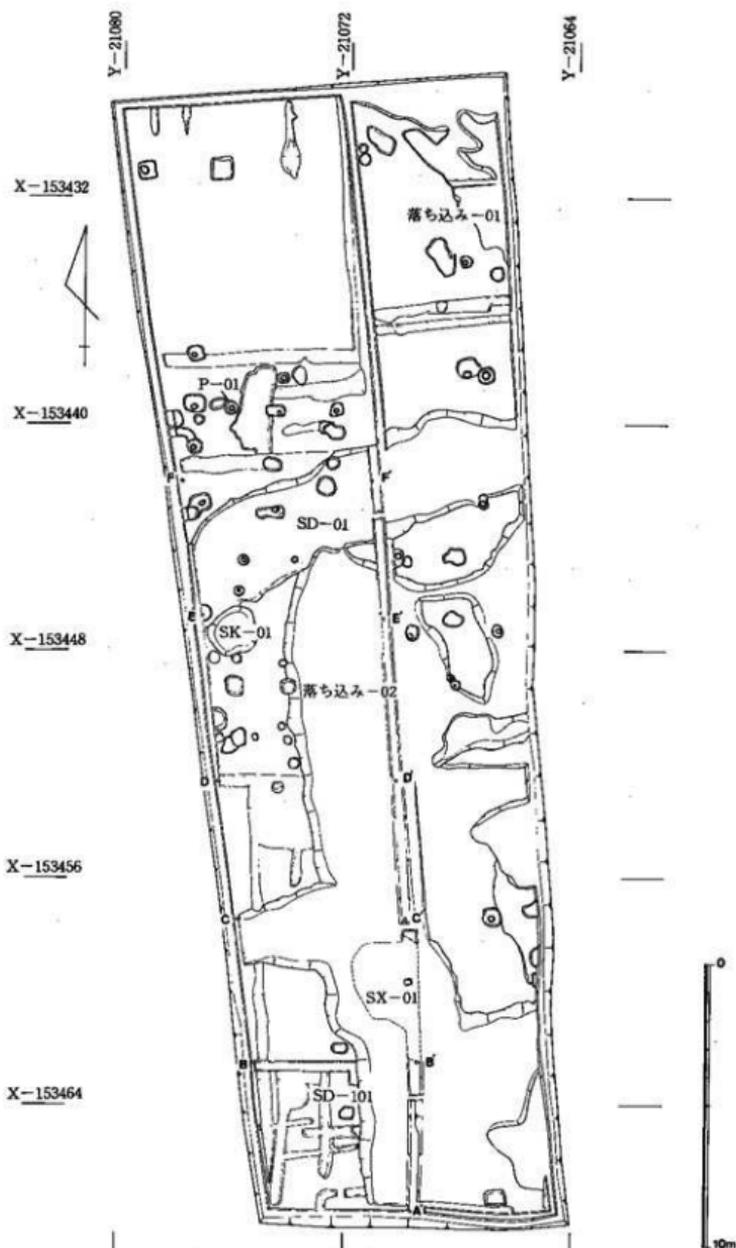


図5 検出遺構平面図 (S:1/200)

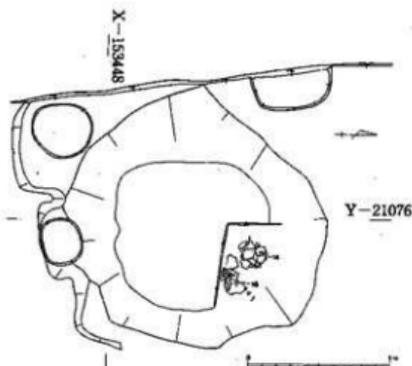


図6 SK-01 平面図 (S:1/40)

構であろう。

SK-01 (図6、図版3-2)

直径約1.8m、深さ約35cmを測る、ほぼ正円形の土坑である。出土遺物には土師器甕が2個体(上半部のみ図13-14・15)ある。遺構の詳細な時期は明らかにできないが、おおむね6世紀前半と考えられよう。なお、遺構の性格については不明である。落ち込み-01 (図7、図版3-1)

不整形の浅い落ち込み状遺構である。深さは約10cm、堆積土層も一層に限られる。人為的に埋め戻されていた。埋没時期は、出土遺物(図13

-11) よりみて5世紀末葉~6世紀初頭である。なお、遺構の性格については不明である。



図7 落ち込み-01 平面図および土層断面図 (S:1/40)

落ち込み-02 (図8・9、図版2)

今回の調査地内において、広範にわたって検出された不整形の落ち込み状遺構である。深さは最深部で約50cmを測る。堆積土層ならびに出土遺物より考えて、6世紀初頭に遺構の下半部分があった埋没(人為埋積)し、若干窪地化した部分にその埋没層(図8-⑭層)を切る形で後述のSX-01が営まれる。SX-01の上を覆う堆積層は図8-⑬層であるが、これについては出土遺物の大半が細片に限られるため、時期を詳細に決定することは困難である。しかし北側の対応層中より僅かながら図12-9等が出土していることから、その時期は7世紀第2四半期頃と考えられる。なお、本

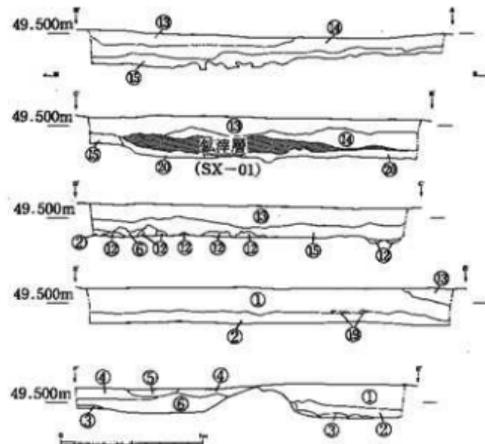


図8 落ち込み-02 縦断土層断面図 (S:1/80)

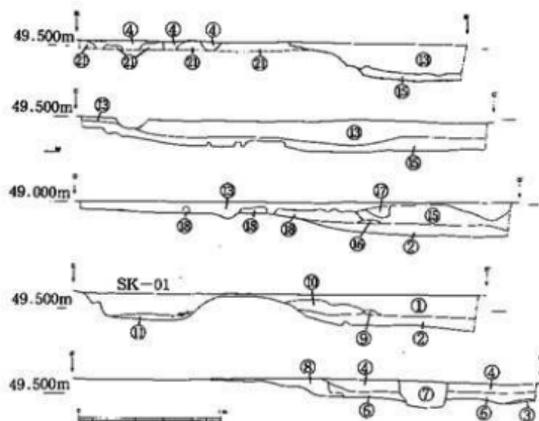


図9 落ち込み-02 横断土層断面図 (S:1/80)

- ① にぶい黄褐 (10YR 5/3) 粘質土層
- ② 灰黄褐 (10YR 5/2) 粘質土層
- ③ 灰黄 (2.5Y 6/2) 砂層
- ④ 暗灰黄 (2.5Y 5/2) 粘質土層
- ⑤ 暗灰黄 (2.5Y 5/2) 粘質土層
(下層に炭屑含む)
- ⑥ 灰黄褐 (10YR 4/2) 粘質土層
- ⑦ 灰黄褐 (10YR 4/2) 粘質土層
(灰白 (5Y 7/2) 粘土ブロック含む)
- ⑧ にぶい黄 (2.5Y 6/3) 粘質土層
- ⑨ 灰黄褐 (10YR 6/2) 粘質土層
- ⑩ にぶい黄褐 (10YR 4/3) 粘質土層
- ⑪ 黒褐 (7.5YR 3/1) 粘土層
- ⑫ 黒褐 (10YR 3/2) 粘土層
- ⑬ 黄灰 (2.5Y 4/1) 粘質土層
- ⑭ 黒褐 (2.5Y 3/1) 粘質土層 (炭含む)
- ⑮ 暗灰黄 (2.5Y 4/2) 粘質土層
- ⑯ にぶい黄褐 (10YR 5/4) 粘質土層
- ⑰ 灰褐 (10YR 4/1) 粘質土層
- ⑱ 黒褐 (10YR 2/2) 粘質土層
(炭屑 (2.5Y 7/4) 粘土ブロック少量含む)
- ⑲ 暗褐 (7.5YR 3/3) 粘質土層
- ⑳ 灰黄 (2.5Y 4/1) 粘土層 (上部に炭含む)
- ㉑ にぶい黄 (2.5Y6/4) 粘質土層 (地山)

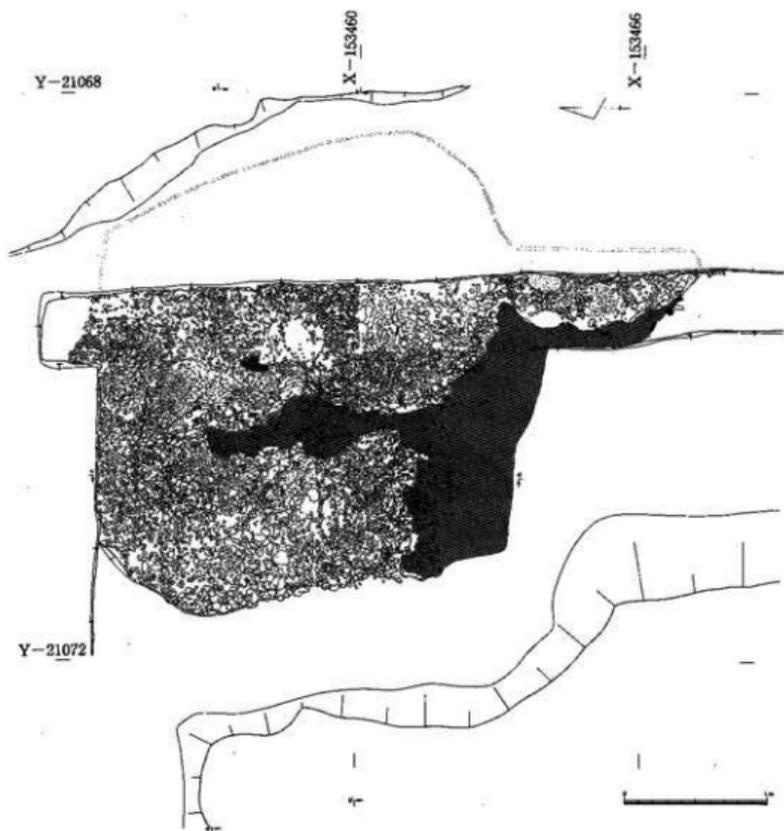


图10 SX-01 平面图 (S:1/40)

遺構が完全に埋没（人為埋積）するのは、出土遺物より判断して9世紀後葉と考えられる。これについては、先の「層序」の項でも触れたように、該地の耕地化に伴うものと考えられる。また、⑬層および⑭層中からは後述のSX-01に関係すると思われる鉄滓が多く出土した（鉄滓については第V章参照）。

SX-01（図10・11、図版4・5）

先述の落ち込み-01の下半部分が埋没した後の、周囲に比べて若干の窪地部分において営まれた特殊な遺構である。上述の埋没層（人為埋積層、6世紀初頭）を若干不整形円形状に掘り込み、細かく砕いた鉄滓をフライパン状の平面形に敷き詰めており、その厚みは最大で約30cmに及ぶ（図8参照）。遺構の中心やや西寄りに灰の集中的な堆積が認められ（図10の斜線部分）、その周辺は受熱による赤化（同トーン部分）が著しい（図版5-1参照）。遺構の規模については、調査者ならびに試掘時の重機運転者の不注意によって遺構の東半を破壊してしまったため、特にその東西方向のデータの詳細は不明であるが、南北長については4.3m、東西長については残存長で約2.3m（復元すれば3m強となろう）を測る。また、既述の掘り方に関しては東西約4.4mを測る。

遺構の時期については、遺構を構成する鉄滓層中に時期を決定する土器等の遺物が全く含まれなかったため明確にはし難いが、先の落ち込み-02の記述中でも触れたように、本遺構が6世紀初頭頃の層を切って営まれていること、またその正面を被覆する層中より7世紀第2四半期の遺物が出土していることから考えると、本遺構の時期もまたそのころ（7世紀前葉）と考えられよう。

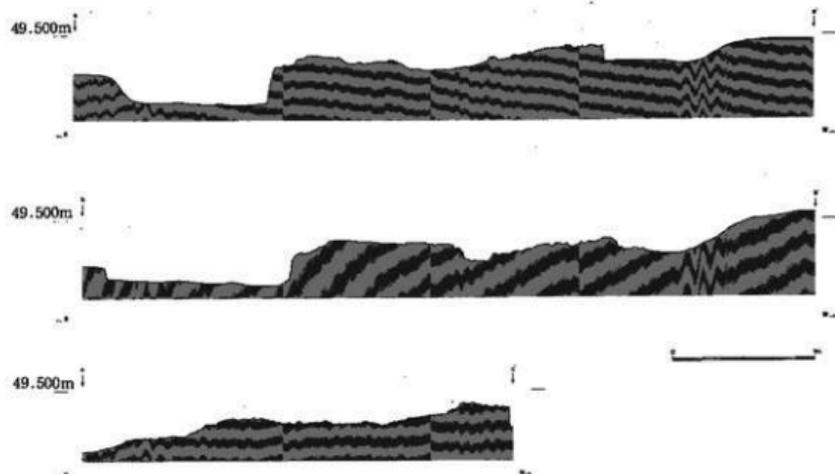


図11 SX-01 断面図 (S:1/40)

遺構の性格については、当初は銅あるいは鉄の鑄造、ないしは精錬関係の遺構であると思われるが、それは後載の第V章、久野雄一郎氏の化学分析に基づく論稿によって否定されている。詳しくは同章を参照されたいが、ここでは本遺構は「窯業に關係する遺構」と結論されている。報告者としては、今後さらに本遺構の具体的な性格について、類例の探索を中心とした調査を実施して行く所存である。

ピット群

今回の調査地の西北部分においては、柱穴（掘り方）とみられるピット群を検出した。その密度は希薄であるが、柱列として並ぶ部分も見られる。今回は調査面積の制約から明確なグルーピングはできなかったが、本調査地周辺には掘立柱建物群が存在する可能性がある。時期については、P-01としたピット掘り方の柱抜き取り後の埋土中より図13-13において示す土師器碗が出土していることから、その下限時期を8世紀前葉頃とすることができる。

素掘小溝群

今回の調査地の南西部分において、特に顕著に素掘小溝群を検出した。時期は、出土土器（図13-12、SD-101より出土）より判断して9世紀前葉である。幅約40cm、深さは約15cmを測り、より新しい時代（12～13世紀頃）に大和において一般化する素掘小溝と比べると、少なくとも規模や断面形状の面で両者は明らかに異なる。なお、本遺構は9世紀後葉頃に調査地南半部分（低地部分）が耕地化されたことを示すものである。また、既述のように落ち込み-01もこのころに完全に埋められている。

3 遺物

落ち込み-02出土遺物（図12、図版9-1～10）

1、2は須恵器杯身である。比較的小ぶりの器体で、底部付近は丸みを帯びる。なお、口縁端部には面を有する。

3は須恵器高杯（脚部）である。短脚で一段の長方形透しを有する。なお、1～3の須恵器は、6世紀初頭（TK-47型式）のものであり、既述のように落ち込み-02の最初の人為埋積層中より出土したものである。

4は須恵器壺蓋である。つまみ部分を欠失する。

5は高台を有する須恵器底部である。器種については不明である。全体に白っぽい胎土が特徴で、内面には自然釉が付着している。東海産か？

6は土師器皿（皿A）である。口縁端部は丸く取められている。また、体部外面にはヘラケズリが施される。

7は黒色土器（A類）碗である。内面のミガキならびに暗文については剥落のため不明。断面三角形の短い高台が付く。

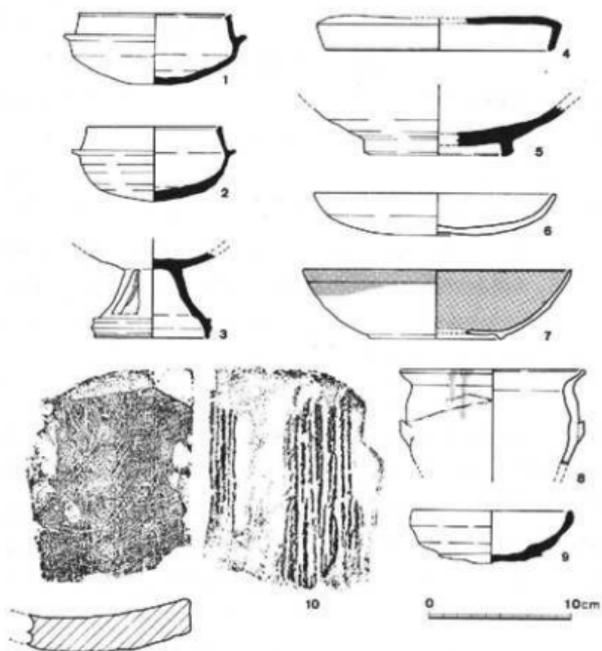


図12 落ち込み-02 出土遺物実測図 (S:1/4)

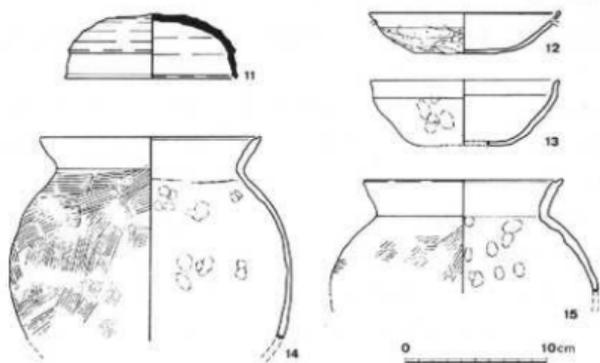


図13 その他の遺構出土遺物実測図

(S:1/4 11=落ち込み-01 12=SD-101 13=P-01 14,15=SK-01)

8は土師器壺(壺B)である。体部外面に形骸化した小さな把手を有する。

9は須恵器杯身である。本資料は通常は杯蓋として認識される形式であるが(杯H蓋)、底部がヘラ切り後全くの未調整なので、ここではこれを身として図化した。時期は7世紀第2四半期(飛鳥Ⅱ型式)と考えられる。なお、本資料はSX-01を被覆する層の対応層より出土しており、同遺構の時期(下限時期)を決定する上で貴重な資料である。

10は平瓦(破片)である。広端面と側面は糸切り状の調整痕が残る。また、凸面にはやや太めの縄目叩きが見られ、凹面には若干の糸切り痕と共に、不明瞭ながら布目も看取される。

以上の出土遺物のうち、4～10に関しては遺構の最終埋積土より出土したものである。その時期は、全体的な様相より判断して(ここでは10は除く)9世紀後葉とすることができよう。

その他の遺構出土遺物(図13、図版9-11-15)

11は須恵器杯蓋である。TK-47型式に属する資料である。落ち込み-01より出土した。

12は土師器碗(碗A)である。外面の底部から体部にかけてヘラケズリが施されている。なお、本資料は対称位置に2カ所の穿孔を有する。素掘小溝(SD-101)より出土した。

13は土師器碗(碗C)である。形状より考えて、8世紀前葉頃のものと考えられる。ビット群のひとつ(P-01)の柱抜き取り後の埋土層より出土した。

14・15は共に土師器甕である。外面にはハケメ調整痕、内面には指頭圧痕を有する。ケズリは施されていない。口縁端部は一周強くナデることによってにぶい面を持たせている。時期については、先述の須恵器とはほぼ同時期(5世紀末葉～6世紀初頭頃)と考えてよからう。SK-01より出土した。

4 小結

神ノ木遺跡の調査において特筆されるのは、いうまでもなくSX-01の検出である。今回は本遺構の具体的な性格(そこで何が作られていたのか)までは考究できなかったが、この問題については今後の類例の探索によって解決の端緒をつかみたいと考えている。いずれにせよ、7世紀頃(この年代については、既述のように必ずしも確実ではない)この地において特殊な製品が製作されていたことは事実であろう。またそれについては、遺跡のすぐ南を当時走っていたであろう「北の横大路」と無関係であるとは思えない。また、それは以前今回の調査地の数百メートル北方で検出されている7世紀の掘立柱建物群(高月遺跡)、そしてやはり7世紀の瓦が出土した来光遺跡とも密接に関係するものであることは確実である。今後周辺の調査をさらに詳細に実施して行く必要があるだろう。

III 神ノ木塚の調査概要

1 調査の事前経過について

神ノ木塚は、今回調査地となった水田の北端に単独でポツリと存在していたごく小さな盛り上がりで、樹や笹が繁茂していたせいもあって、周囲に比してやや異様な雰囲気を感じ出していた（図版6-1）。調査前の実測図は図14に示す通りで、一辺3m強の方墳状の外形を呈していた。また、高さは約1mであった。この塚については、調査前においては古墳の残骸、子墓、金塚等の説があったが、いずれにせよ工事に先行して発掘調査が必要と思われる、教育委員会としてはその旨を事業担当部署まで申し入れた。ところが、諸般の事情によってここでは発掘調査（およびそれに続く道路工事）に際して民間折禱師によるお祓いが行われることとなった。その際、折禱師がこの塚に死者が葬られている、との託宣を述べたため、調査に先立って、塚の上に自生していた樹木を移転させることとなった。託宣自体は今回の調査成果を見れば明らかなように、笑止なものではあったが、このため調査に先行して造園業者のミニコンボにより樹木の抜き取り作業が実施されたため、調査そのものは、その当初より大きなダメージを受けてしまう結果となった。

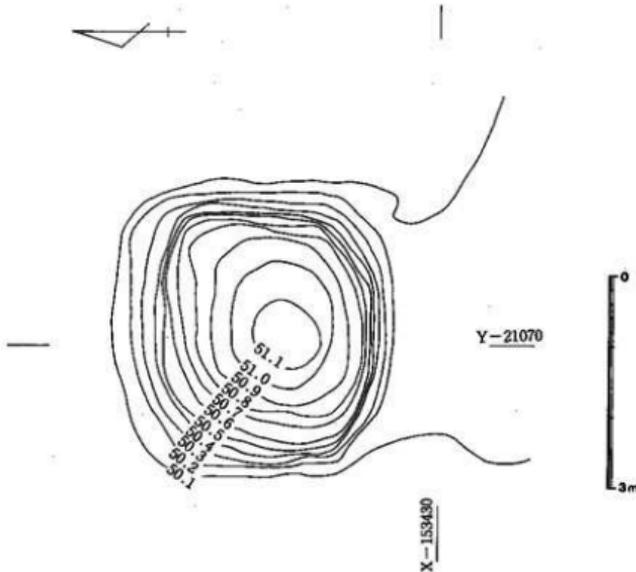


図14 神ノ木塚調査前平面図 (S:1/80)

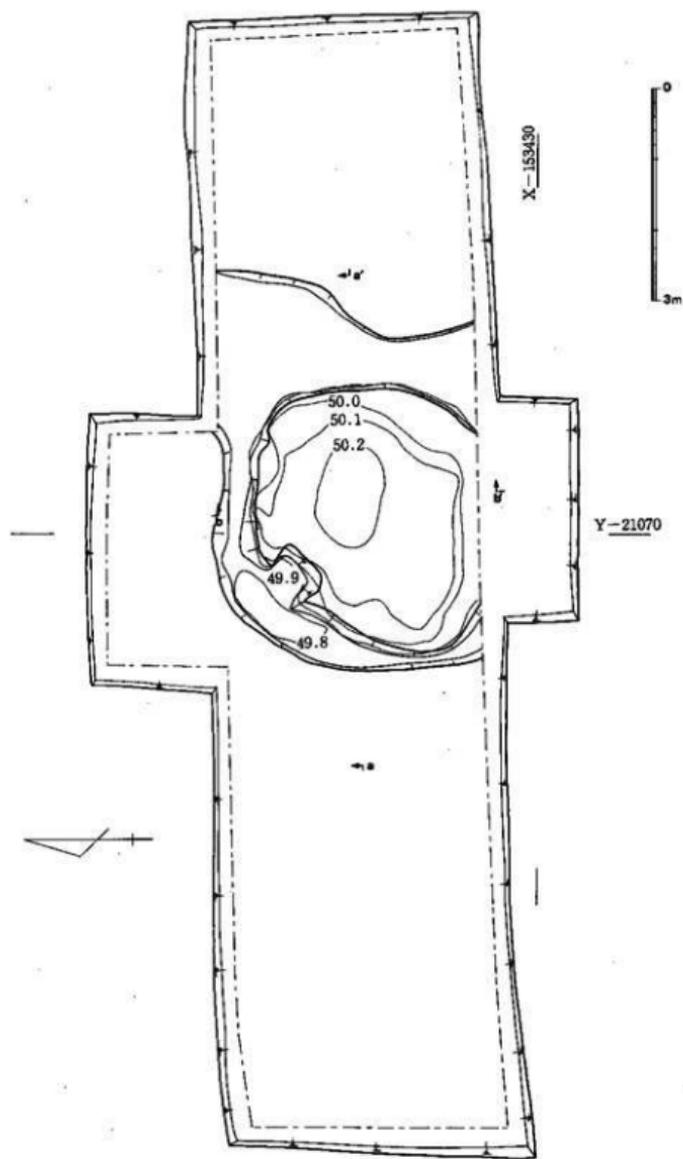


图15 神ノ木塚検出遺構平面図 (S:1/80)

2 遺構 (図15、図版6-2)

図15は、周辺の耕土、床土層 (ここでの基本層序については、図4-右に準ずる) を除去した状態での実測図である。この段階ですでに塚自体の盛土は樹木の「根巻土」として持ち去られている。土層断面図 (図16) もこの段階のものであるが、同図によって明らかなように、盛土そのものは厚いところでも10cm弱しか残っていなかった。なお、盛土中からは若干の磁滓が出土した (図版12)。また、言うまでもないことだが、墓塚等の埋葬関連施設は一切検出されなかった。さらに、後述のように今回の神ノ木塚の調査における出土遺物については、ほとんどが樹木抜き取り中に採集したものであるが、その中に副葬品、ないしは供献品と考えられる遺物は認められなかった。

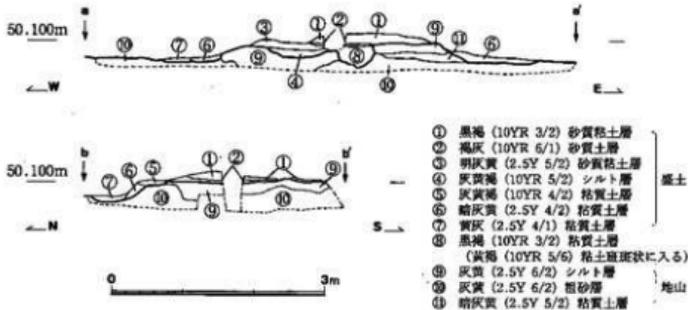


図16 神ノ木塚土層断面図 (S:1/80)

3 遺物 (図17、図版10~12)

ここで報告する遺物については、いずれも既述の樹木の移転に伴って出土したものであり、そこに立ち会った筆者らが採集したものである。したがって、それらについては明確な出土層位は不明である。遺物の大半は先に報告した神ノ木遺跡SX-01関連の磁滓 (図版12) であったが、中には図17や図版10、11で紹介するような土器・陶磁器等の近世~近代期の遺物がみられた。

1は肥前系陶器碗である。高台内面も含めて全体に藁灰釉を施した後、透明釉を施す。なお、高台壘付の釉は剥ぎ取られている。いわゆる呉器手と呼ばれるものであり、17世紀代に属するものと思われるが、さらに詳細な時期については不明である。

2は瀬戸・美濃系の陶器天目茶碗である。釉色は鉛色を呈し、胎土は薄い赤褐色を呈する。16世紀後葉 (大正IV期か?) 頃のものであろう。

3は近在系陶器緑釉平鍋蓋である。天井部には5条の隔擋同心円文が描かれている。なお、内面についても緑釉である。釉色はオリーブ色を呈し、胎土は暗灰色を呈する。幕末~明治初めにかけてのものであろう。

4は磁器染付碗である。外面は紙型摺によって幾何学文が施され (呉須は酸化コバルト使用)、ま

た内面見込みにも文様（意匠不明）がみられる。なお、口縁端部には緑釉が塗布されている。明治年間のものであろう。

5は近在窯系灰釉陶器灯火具（ひょうそく）である。底面および脚部内面は、無釉。なお、釉の表面には細かい貫入が多くみられる。

6は白磁小坏である。極端な端反りの器形と、外面に流し掛けとした白濁釉が特徴。時期は、管見に類例を見ないため確言はできないが、調整その他の特徴より考えて、17世紀代の製品と考えられる。

7、8は土師皿（中型品）である。いずれも口縁端部に煤を付着しており、灯明皿として使用されたものであることが知られる。大和においては、こうした土師皿の中型品は、17世紀末葉ではぼ姿を消すものである。本製品も、17世紀代のものであろう。

9～12は土師皿（小型品）である。このうち10のみがやや古相を止めるが、他のものはいずれも幕末期のものであろう。

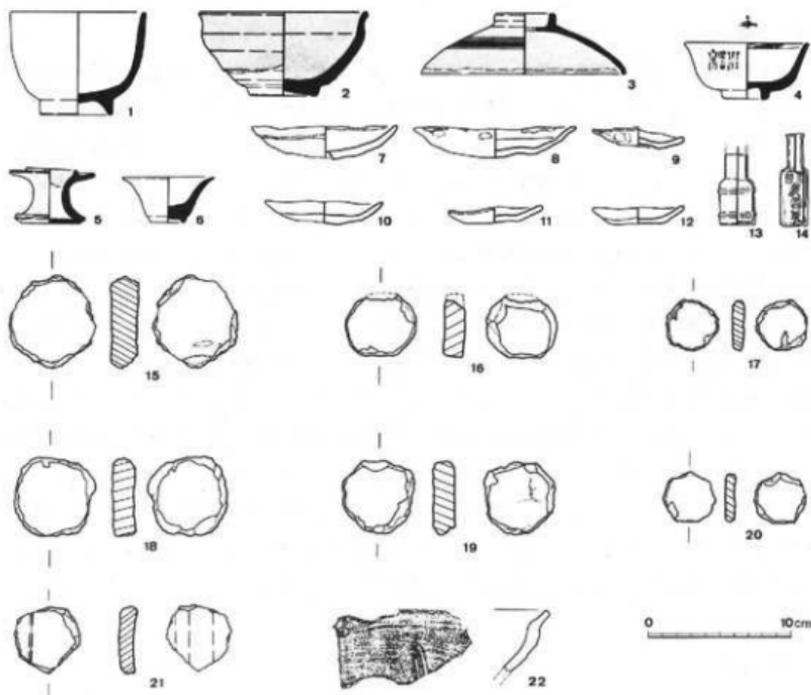


図17 神ノ木塚出土遺物実測図 (S:1/4)

13、14は目薬の瓶である。14に関しては「目薬 廣岡製」の銘を有する。時期については、不明である。

15～21はいずれも土製円板（泥メソコ）である。このうち15、16および18、19は瓦の破片の周囲を打ち欠き部分的に磨いたもので、17、20は瓦質土器片、21は陶器片をそれぞれ原料として用いている。

22は、瓦質土器摺鉢（破片）である。口縁部が強く屈曲するのが特徴で、焼成はやや土師質化している。なお、摺目の本数等は不明である。時期は、16世紀末葉～17世紀初頭と考えられる。

図版11-101、102は、サヌカイト製の火打石である。大和郡山近辺では、幕末頃には火打石は石英製のものが卓越するようなので、これについてはそれ以前の時期を考えるべきかもしれない。

今回採集された神ノ木塚盛土中に含まれていた土器・陶磁器にはここで報告したものの他に、17世紀前葉の唐津焼（砂目）や18世紀代に特に特徴的に現れる肥前波佐見焼（いわゆる「くらわんか手」）を主要な標識とする一群）等も存在する。

4 小結

以上の遺構および出土遺物の検討より知り得た、神ノ木塚の性格等について總括する。結論から先に述べると、この塚はいわゆる「金屎塚」に類するものである。先にⅡ-1項で触れたように、今回の（神ノ木遺跡まで含めた）調査範囲のうち、南方の低地部分については9世紀後葉より耕地化がなされたが、より北の微高地部分については耕地開発が遅れていたものと思われる。神ノ木塚のあるあたりが耕地化されるのは、その盛土中に含まれる遺物が示すように、16世紀末～17世紀にかけてであったと思われる。その直接の端緒となったのは、富雄川や佐保川の川筋の固定による水田用水の安定的確保、ならびにそれよりやや遅れて一般化する溜池の築造であっただろう。耕地化に伴う開発の際、神ノ木塚の周囲の地形のうち、盛り上がった部分は平坦に削られる（その際生じた土は、当然低地部分の埋め立てに用いられたであろう⁶⁾）。神ノ木塚の原型は、こうした耕地開発のいわば「削り残し」であり、それは当初はいわゆる「鳥島」を意図したものであったかもしれない。しかしながら、この周囲の土壌にはSX-01等の特殊遺構に起因する、7世紀代の鉱滓が広範、かつ多量に含まれていたものと思われる。神ノ木塚は、いつしかそうした鉱滓や土器・陶磁器片等の、耕作にとって障害となるものの集積場となった。そして農民の絶え間無い努力によって耕作地の表土中から鉱滓が姿を消し、そのかつての集積場が樹木等の繁茂によって単なる独立した異様な外見の地上表徴となった時、その本来の意味を知る人はそこに存在しなかったのである。

IV まとめ

今回の調査では、特殊な製品を作っていたと考えられるSX-01の検出を軸に、多くの貴重なデータを得ることができた。この遺構の本当の意義は、今後継続して行われて行く予定の周辺調査の終了を待って、改めて語る機会があるものと思う。

また、神ノ木塚については、当初「死人が葬られている」などと、とんだ濡れ衣を着せられたが、科学的な調査は、これを鉱滓などのゴミの集積場として正しく認識した。つまり、本遺構は大和における耕地開発の歴史を探るうえで、貴重な資料として捉えられるものであることが明らかとなった。

なお、調査地の周辺には「金屎塚」と称される神ノ木塚によく似た塚が数基存在する。この場合、それが実際にある種の鉱滓を集積したものであるならば、当然その近辺にはそれを排出した何らかの施設が存在するはずである。それが考古学的事実として確認された時、それはこのあたりを遺跡の希薄な地域としてきた考古学研究者の従来認識を、全く異なったものとするに違いない。

※神ノ木塚の調査に際し、堀内正之氏（小林町225）より多大な御協力をいただきました。

末尾となり恐縮ですが、記して感謝いたします。

【註】

- 1 山川均『高月遺跡発掘調査報告書』大和郡山市教育委員会 1991
- 2 山川均『来光遺跡第1次発掘調査概報』大和郡山市教育委員会 1992
- 3 『国立歴史民俗博物館研究報告』第10集 国立歴史民俗博物館 1986および同第20集 1989
- 4 こうした大和における耕地開発について、考古学的に詳細な検討が加えられたものとしては、寺沢薫「大和における中世開発の一様相」『桑里制研究』第7号 1991および同『箸尾遺跡を掘る』権原考古学研究所 1994等を参照。

V 神ノ木遺跡出土資料の金属学的調査

三宝伸銅工業(株)

久野 雄一郎

1 はじめに

平成5年10月、大和郡山市教育委員会より、同市、神ノ木遺跡から出土した金属滓と思われる資料10点の調査の依頼を受けた。

同遺跡の遺構SX-01の土質は、熱の影響を受けたと思われる外観を呈し、木炭質の混入によって灰色を呈していることから、鑄造に関係した遺跡ではないかと考えられた。

各資料について外観観察、成分分析のほか、2資料中の銅イオンによる着色部分の組織観察を行った。

2 外観・重さ

- 2-1 試料1は、黒色タール状塊の表面に茶色の錆状物質が付着している。
重さは32.6gで、磁性はない。
- 2-2 試料2は、黒色物質の塊の表面に黄色の土質が焼け付いたような外観を呈している。
重さは32.7gで中程度の磁性が認められる。
- 2-3 試料3は、黒灰色の物質の表面に鉄錆状物質が付着しており、断面には気泡が認められる。
重さは44.6gで、磁性はない。
- 2-4 試料4は、土質塊に木炭片や石が混入しており、表面は鉄錆状物質でおおわれている。
重さは120.7gで、磁性はない。
- 2-5 試料5は、うすい灰色の土質塊で木炭片が混入しており、表面は鉄錆色を呈している。
重さは299.4gで、一部に磁性が認められる。
- 2-6 試料6は、白灰色の土質塊で、青白色の点が点在している。
重さは53.9gで、磁性はない。
- 2-7 試料7は、白灰色の土質塊で、表面には黒色物質が熔着している。
重さは86.1gで、磁性はない。
- 2-8 試料8は、土質塊表面に黒色物質が熔着しており、青白色の物質が点在している。
重さは165.6gで、磁性はない。
- 2-9 試料9は、熱のため赤茶色に着色した土質塊であり、表面に褐色で気泡の多い物質が付着している。
重さは134.8gで、磁性はない。

成分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	分析方法	備考
FeO	8.15	10.65	13.12	6.66	1.60	6.88	7.64	6.14	4.63	7.41	測定法	JIS M-8212 FeO JIS M-8213
Fe ₂ O ₃	5.67	15.96	9.42	3.52	18.30	2.92	2.81	2.56	6.49	17.13	計算法	
SiO ₂	67.97	56.47	55.83	59.19	60.88	67.75	67.21	64.52	65.59	56.18	重量法	JIS M-8214
Al ₂ O ₃	13.78	13.65	13.66	13.38	12.89	17.86	17.92	16.90	16.46	12.11	I C P 法	
CaO	2.07	1.58	1.82	12.80	1.60	1.69	1.65	3.22	1.88	1.25	"	
MgO	0.41	0.50	0.45	1.53	0.43	0.53	0.50	0.68	0.46	0.36	"	
TiO ₂	0.47	0.47	0.42	0.47	0.50	0.60	0.58	0.53	0.57	0.40	"	
P	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	0.15	測定法	JIS M-8216
S	<0.01	0.003	0.007	0.011	0.009	0.005	0.006	0.018	0.008	0.066	ヨード滴定法	
C	0.14	0.05	1.72	1.25	2.87	0.05	0.04	0.06	0.09	0.58	赤外線分析法	
Cu	0.11	0.36	0.04	0.03	0.04	0.21	0.99	1.50	0.17	0.22	I C P 法	
MnO	0.046	0.079	0.063	0.32	0.077	0.054	0.044	0.119	0.071	0.052	"	
Zn	0.015	0.02	0.008	0.023	0.007	0.014	0.026	0.018	0.015	0.02	"	
Cr	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	"	
Ni	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	"	
Co	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	原子吸光法	
Pb	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	0.02	0.05	<0.01	<0.01	I C P 法	
O											熱伝導方式	
Sn	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	原子吸光法	
Sb	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	I C P 法	
As	0.15	0.15	0.16	0.15	0.14	0.20	0.21	0.37	0.20	0.15	"	
合計	98.991	99.942	96.718	99.334	99.343	98.763	99.646	96.685	96.634	96.078		

表1 各試料の成分分析結果 (%)

2-10 試料10は、灰白色の土質の表面に黒色溶融物質が付着している。断面には気泡が多く認められ、黄色の部分が点在する。断面には磁性を示す部分が認められた。

重さは440.5gである。

各試料の外観は、写真1～10に示すとおりである。

3 成分分析

各試料の成分分析結果は、表1のとおりである。また、試料10においては金属質が認められたのでこれを定量分析し、表2に示す結果を得た。

Fe	94.88	Mn	0.003
Si	0.21	Zn	0.003
Al	0.055	Cr	<0.01
Ca	0.03	Ni	<0.01
Mg	0.004	Co	<0.01
Ti	0.002	Pb	<0.01
P	0.45	O	4.70
S	0.14	Sn	<0.01
C	0.50	Sb	<0.01
Cu	0.13	As	0.03

表2 金属質の分析結果 (%)

4 組織

試料7および8においては写真11、12のとおり青色のガラス質の領域が認められたので、この部分をX線マイクロアナライザーによって観察した。

写真13および14は、試料7および8の組成像である。

写真13の組織は、けい素、アルミニウム、カリウム、カルシウム、鉄、チタン、マグネシウムの酸化物からなる1相のガラス質からなり、銅、ヒ素が僅かに均一に分布している。

写真14の組織も写真13と同様のガラス質1相であるが、その中に鉄、銅合金粒子が点在しており、ヒ素も僅かに均一に分布している。

5 まとめ

以上の結果をまとめると、これらの資料は鉄、銅の精練滓や鍛冶滓とは考えられない。

土壌物質が熱によって溶け、ガラス状になったもので、その中に銅粒子が混入し一部溶解し、青く発色したものと考えられる。

鉄や銅の溶解、鋳造施設であるよりは、鉄分の多い窯業に関係のある施設の可能性の方が大きいのではないかと考える。

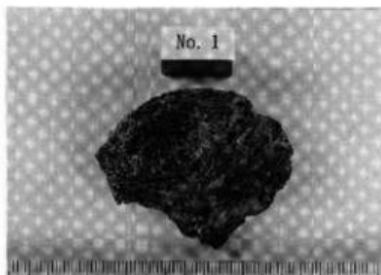


写真1 試料1

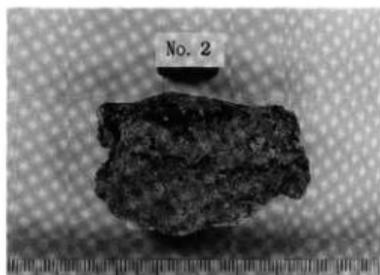


写真2 試料2

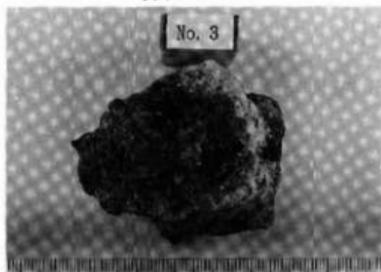


写真3 試料3

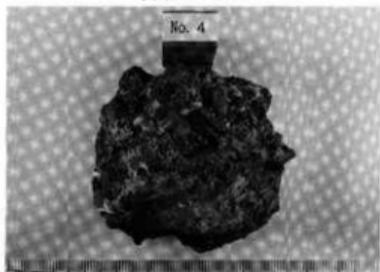


写真4 試料4

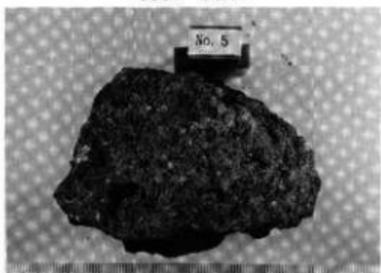


写真5 試料5

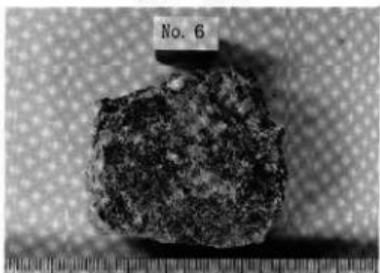


写真6 試料6

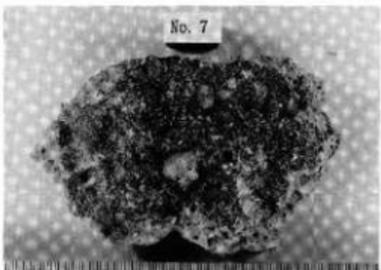


写真7 試料7



写真8 試料8



写真9 試料9



写真10 試料10

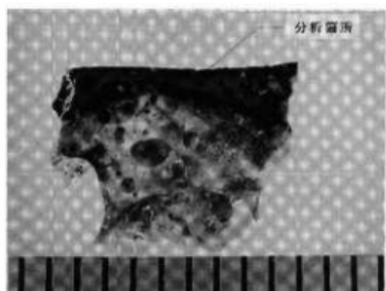


写真11 試料7 ガラス質の部分

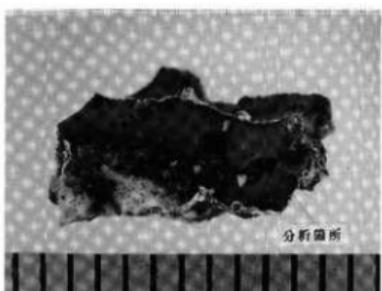


写真12 試料8 ガラス質の部分

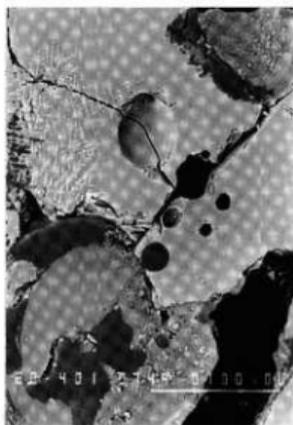


写真13 試料7 組成像 (×400)



写真14 試料8 組成像 (×400)

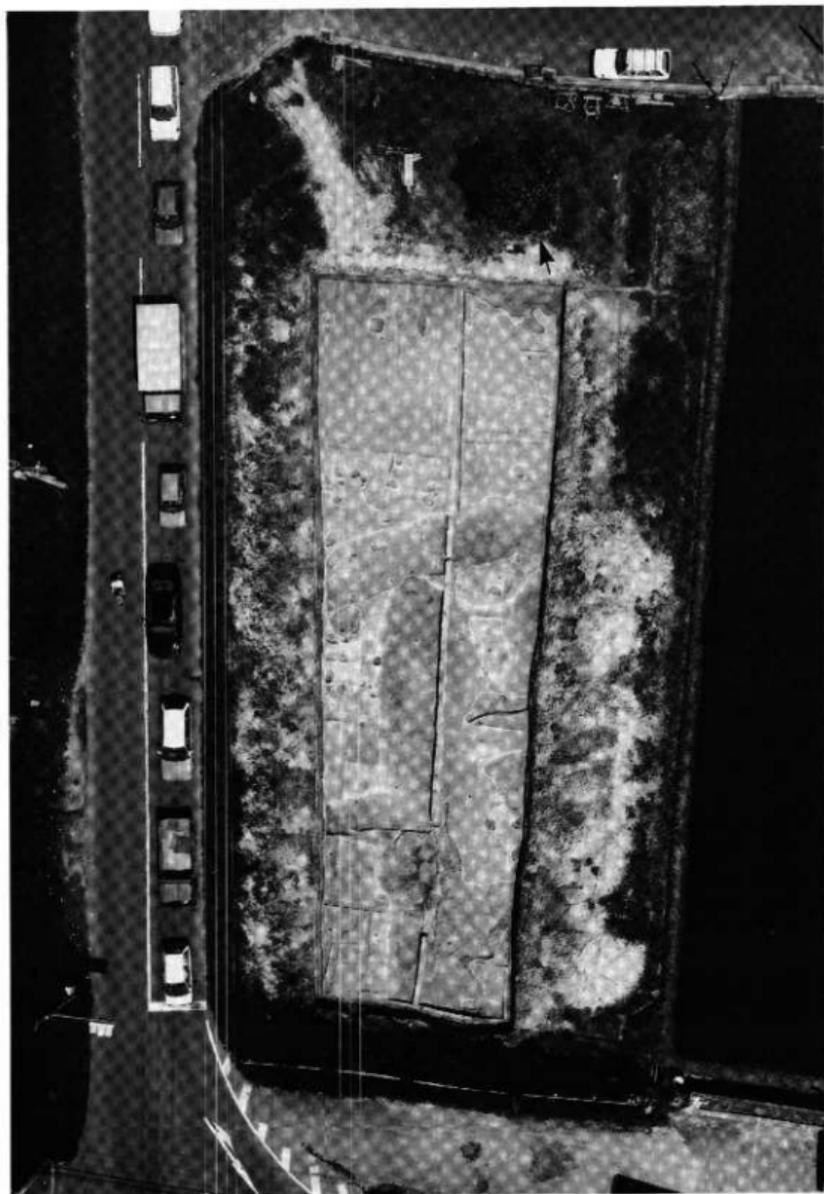
遺物No.	器 種	計測値 (cm)			色 調	形 状		備 考
		口徑	底徑	器高		最大径	外 面	
1	須恵器 杯身	10.8(Ⅱ)		5.0	13.9(Ⅱ)		口クロナ子	
2	須恵器 杯身	9.4(Ⅱ)		5.3	11.6(Ⅱ)		口クロナ子	
3	須恵器 高杯		8.0				口クロナ子	透孔 3
4	須恵器 壺蓋	15.6(Ⅱ)			17.2(Ⅱ)		口クロナ子	
5	須恵器		9.3(Ⅱ)				口クロナ子	内面に自然釉
6	土師器 皿	15.5(Ⅱ)		3.0		明赤褐色5YR5/6	口：ナ子 体～底：ケズリ	ⅡA
7	土師器 柄	19.0(Ⅱ)		9.3(Ⅱ)	4.9	にぶい黄褐色10YR7/3	口：ナ子 体：ナ子押捺 底：ナ子 ナ子	黒色土器A類
8	土師器 壺	12.9(Ⅱ)			15.1(Ⅱ)	赤黄2.5YR7/3	ナ子	蓋B 貼付把手 口縁部に残付着
9	須恵器 杯身	11.1		3.8	10.5		口～体：口クロナ子 底：未調整	口クロナ子
10	平耳						凸面 横目印き	
11	須恵器 杯蓋	12.1(Ⅱ)			4.5		口クロナ子	
12	土師器 柄	13.4		2.9		褐色5YR6/6	口：ナ子 体～底：ケズリ	柄A 円孔 2
13	土師器 柄	13.4(Ⅱ)		4.5		明黄褐色10YR7/5	口：ヨコナ子 体：押捺	柄C
14	土師器 甕	15.4(Ⅱ)				暗褐色10YR4/3	口：ヨコナ子 体：ハケメ	口：ヨコナ子 体：押捺
15	土師器 甕	14.0(Ⅱ)				にぶい黄7.5YR5/4	口：ヨコナ子 体：ハケメ	口：ヨコナ子 体：押捺

表 3 神ノ木遺跡出土遺物観察表

遺物№	器 種	計測値 (cm)				色 調	面 積		備 考
		口 径	底 径	器 高	最大径		外 面	内 面	
1	陶器 碗	9.4(Ⅱ)	4.5(Ⅱ)	7.3					天目茶碗
2	陶器 碗	11.8(Ⅱ)	4.4	5.0					
3	陶器 蓋	26.0(Ⅱ)	4.7	4.4					
4	磁器 碗	8.8(Ⅱ)	2.5	3.9					
5	陶器 灯火具		4.0	4.0	6.0				
6	白磁 小坏	6.5(Ⅱ)	1.9	3.2					
7	土師皿	10.2(Ⅱ)		2.2		にぶい黄橙10YR7/4	口：ナデ 体～底：押捺ナデ	ナデ	口縁部に灰付着
8	土師皿	11.4(Ⅱ)		2.1		にぶい黄橙10YR7/4	押捺 ナデ	ナデ	口縁部に灰付着
9	土師皿	6.4		1.3		明赤褐5YR5/6	押捺	ナデ	
10	土師皿	8.2(Ⅱ)		1.5		にぶい黄橙10YR7/4	口：ヨコナデ 底：押捺	ナデ	
11	土師皿	6.6(Ⅱ)		1.3		明赤褐5YR5/6	口：ヨコナデ 底：押捺	ナデ	
12	土師皿	6.6(Ⅱ)		1.1		明赤褐5YR5/6	口：ヨコナデ 底：押捺	ナデ	
13	ガラス 瓶	1.2	1.4	6.5					
14	ガラス 瓶		2.2		2.4				
15	土製円板	径 6.6	厚 2.0						目薬 廣岡製 瓶入り
16	土製円板	径 5.0	厚 1.3						瓦片
17	土製円板	径 3.7	厚 0.8						瓦質土器片
18	土製円板	径 5.7	厚 1.7						瓦片
19	土製円板	径 5.0	厚 1.5						瓦片
20	土製円板	径 3.6	厚 0.7						瓦質土器片
21	土製円板	径 4.7	厚 1.1						陶器片
22	瓦質 槽鉢								

表4 神ノ木塚出土遺物調査表

圖 版



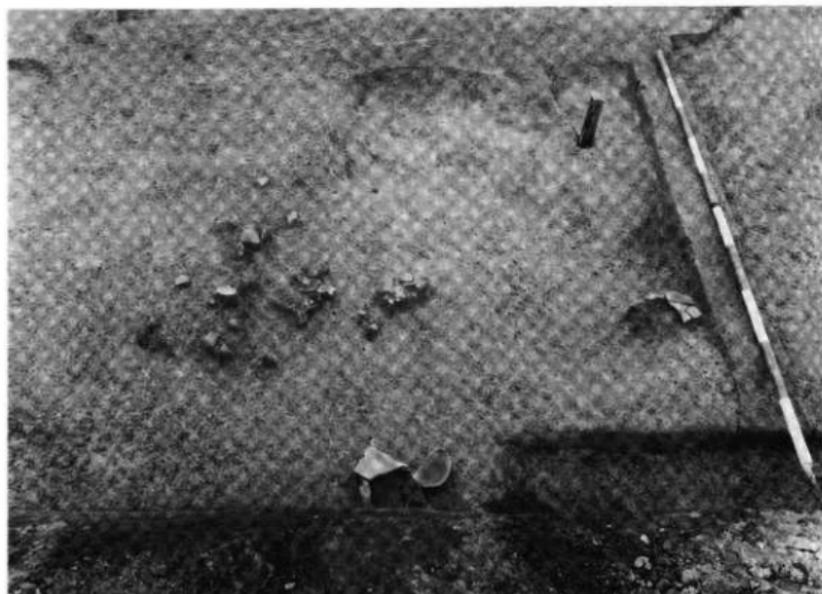
調査地空中写真（真上より 調査区北側に神ノ木塚=矢印 上が北）



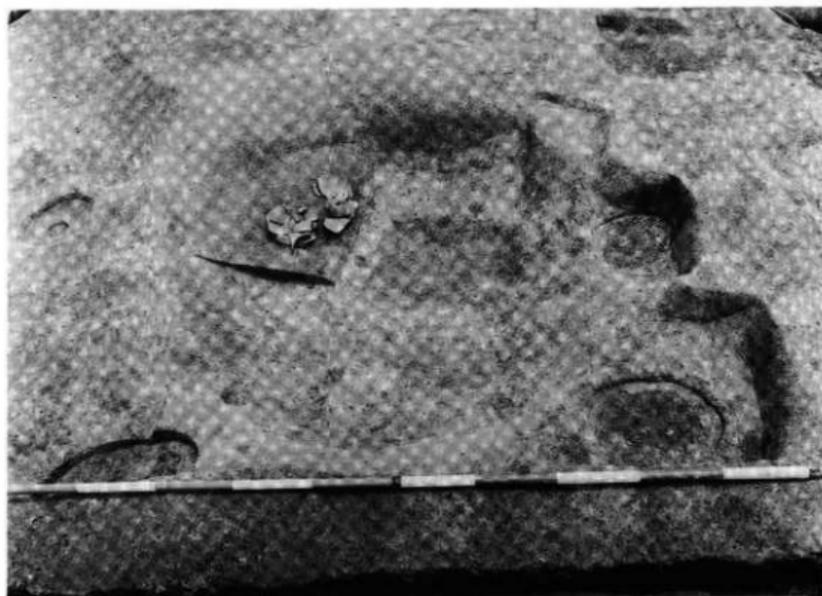
1 調査地全景（北より）



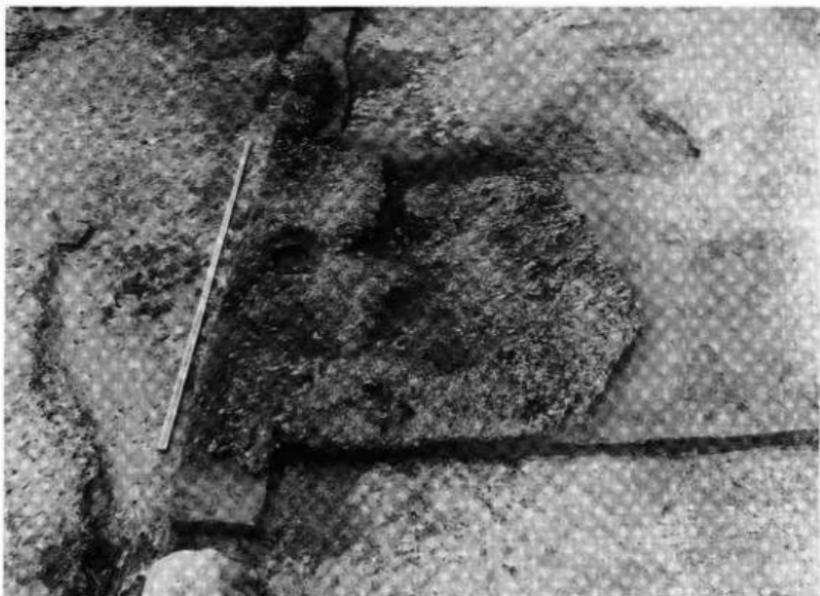
2 同上（南より）



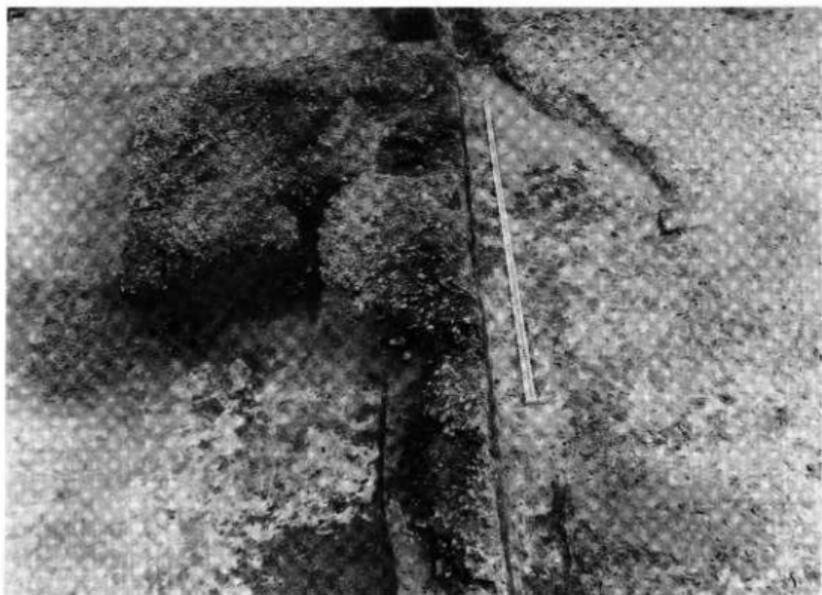
1 落ち込み-01遺物出土状況（東より）



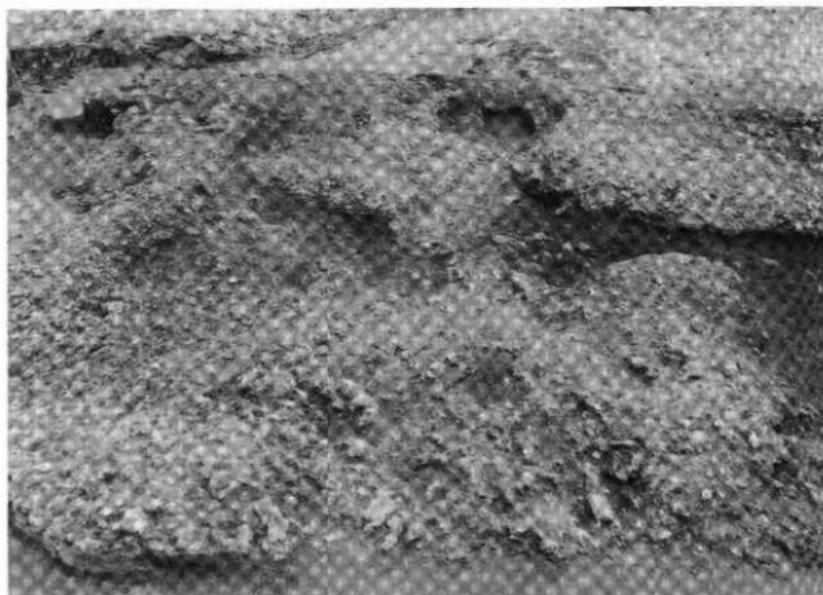
2 SK-01 遺物出土状況（西より）



1 SX-01全景 (北より)



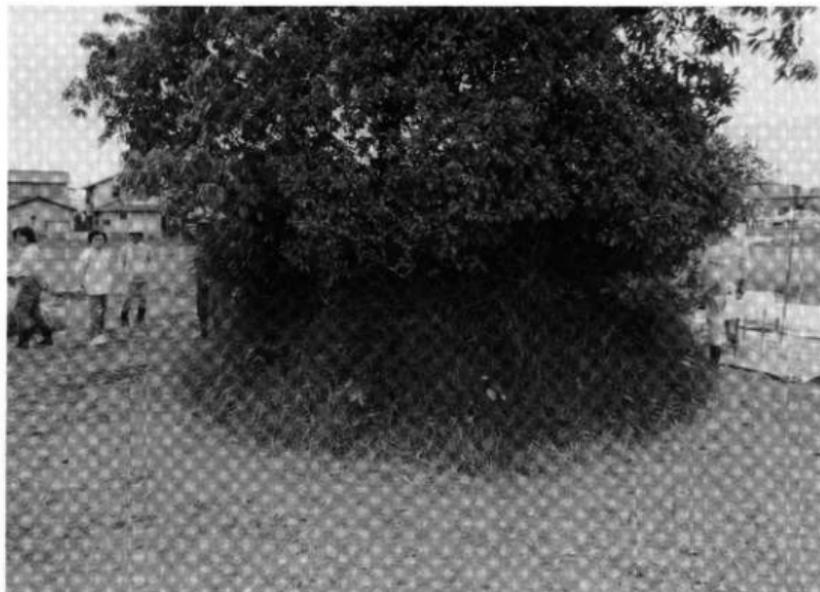
2 同 上 (南より)



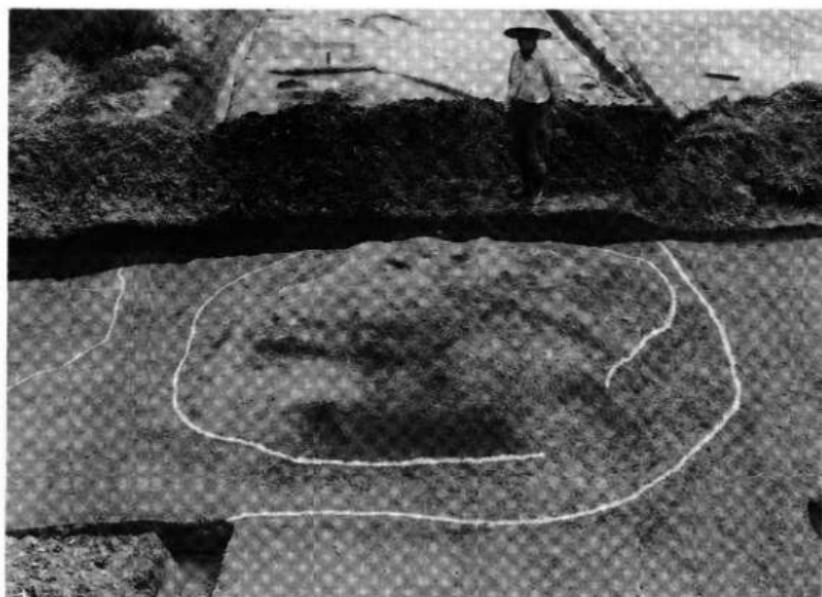
1 SX-01部分 (西より)



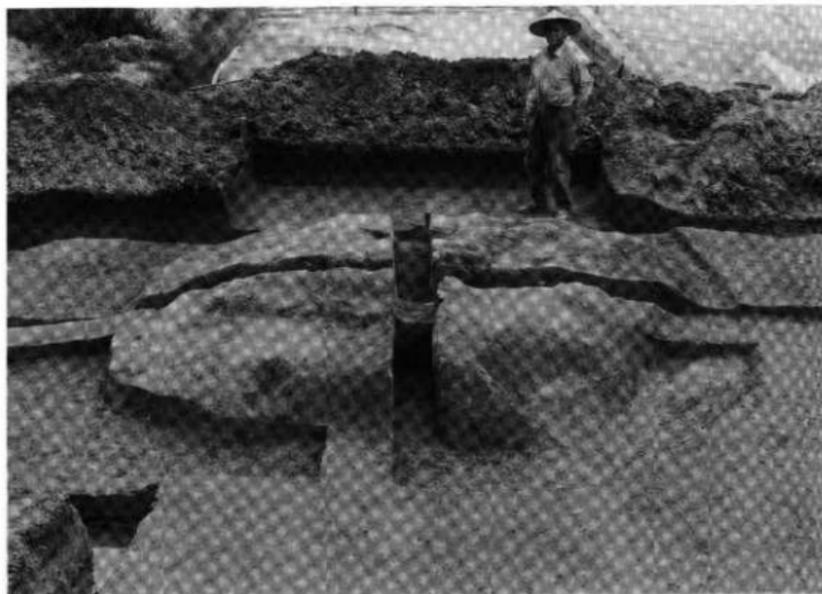
2 同 上 (調査風景)



1 調査前の状況（北西より）



2 表土除去後の状況（樹木移転時に盛土の大半も失われた 北より）



1 塚本体断ち割り状況（北より）



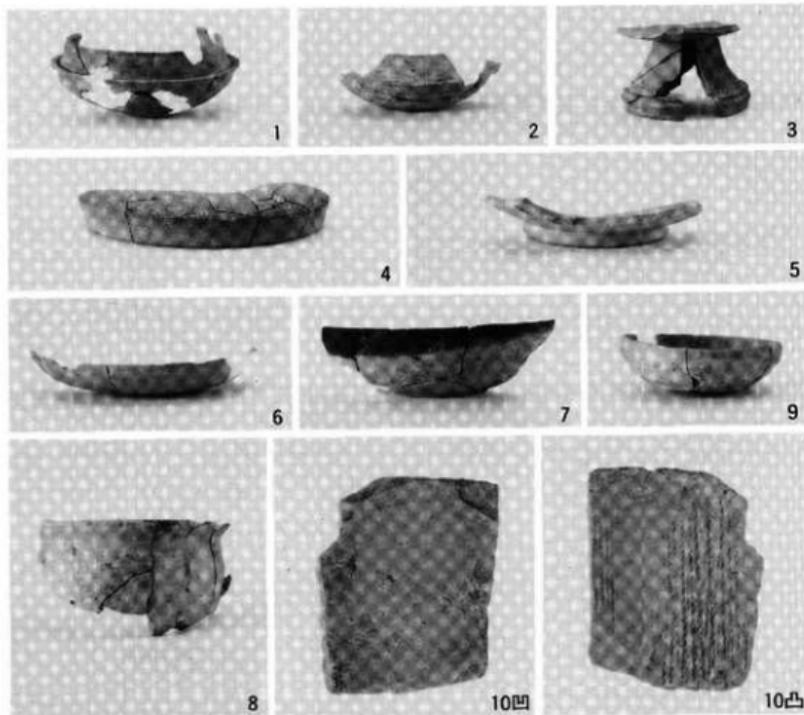
2 調査風景（北より）



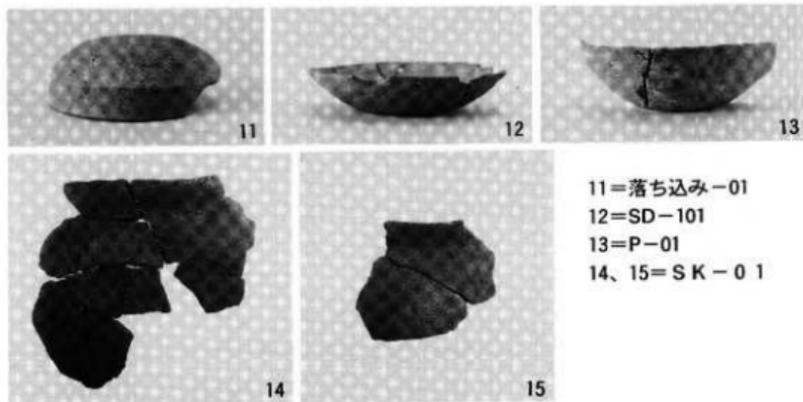
1 南北土層（西より）



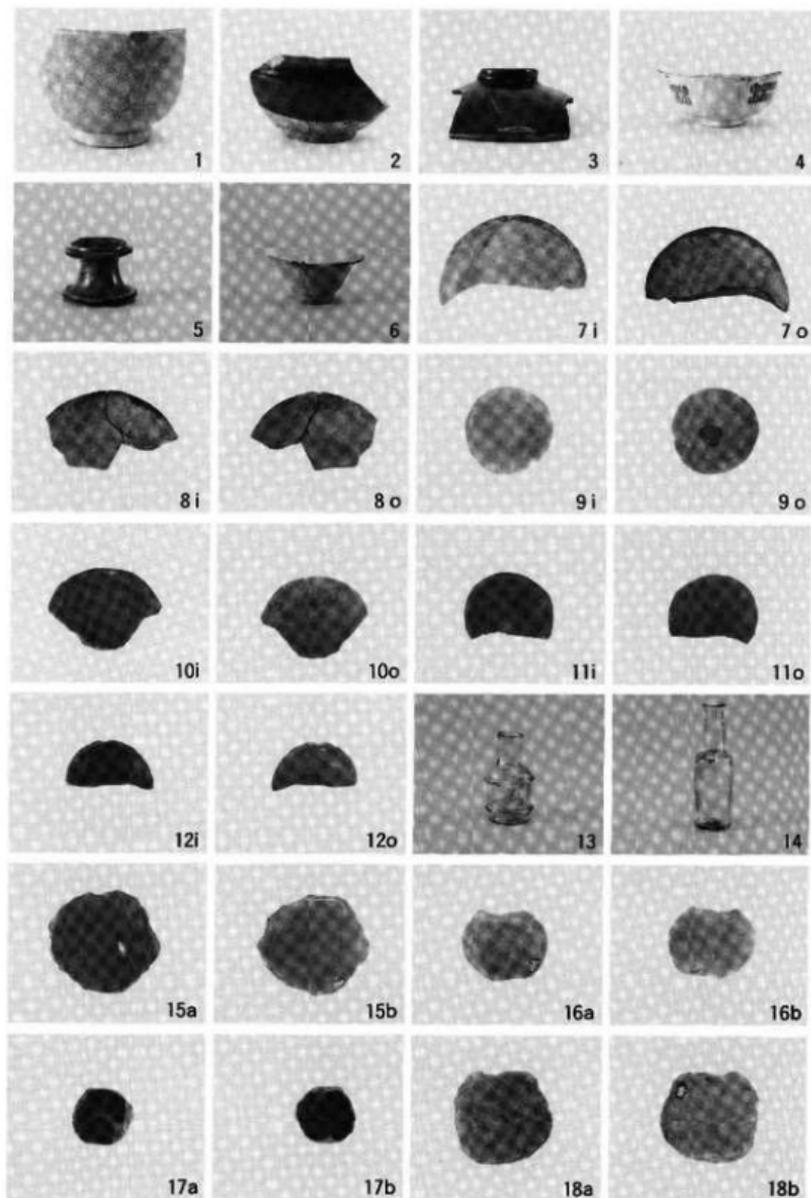
2 東西土層（南より）

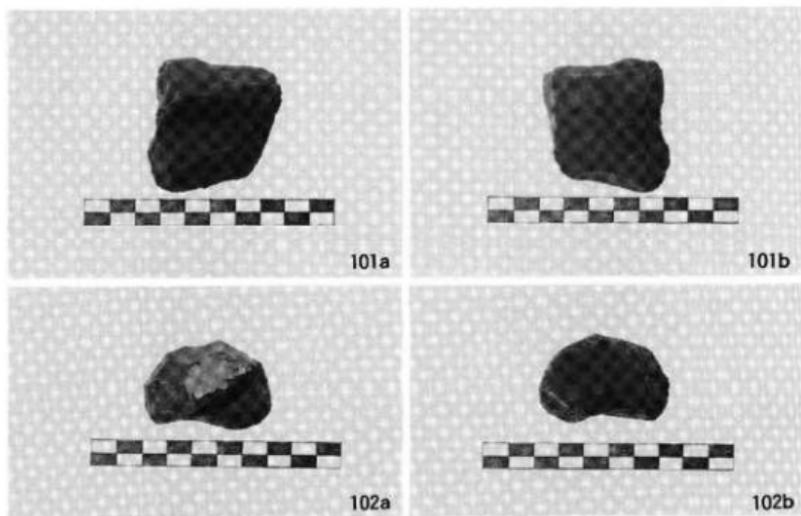
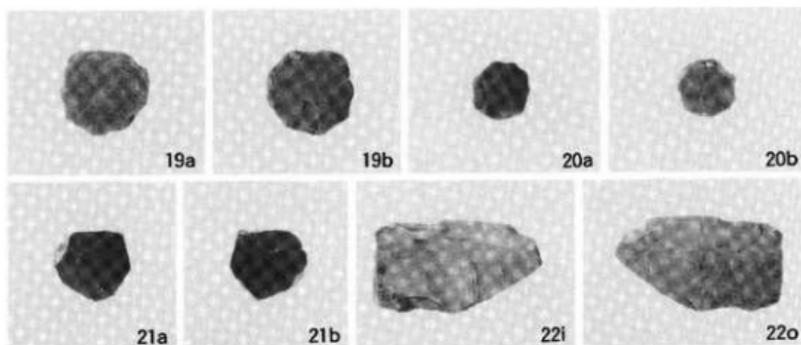


落ち込み-02出土遺物

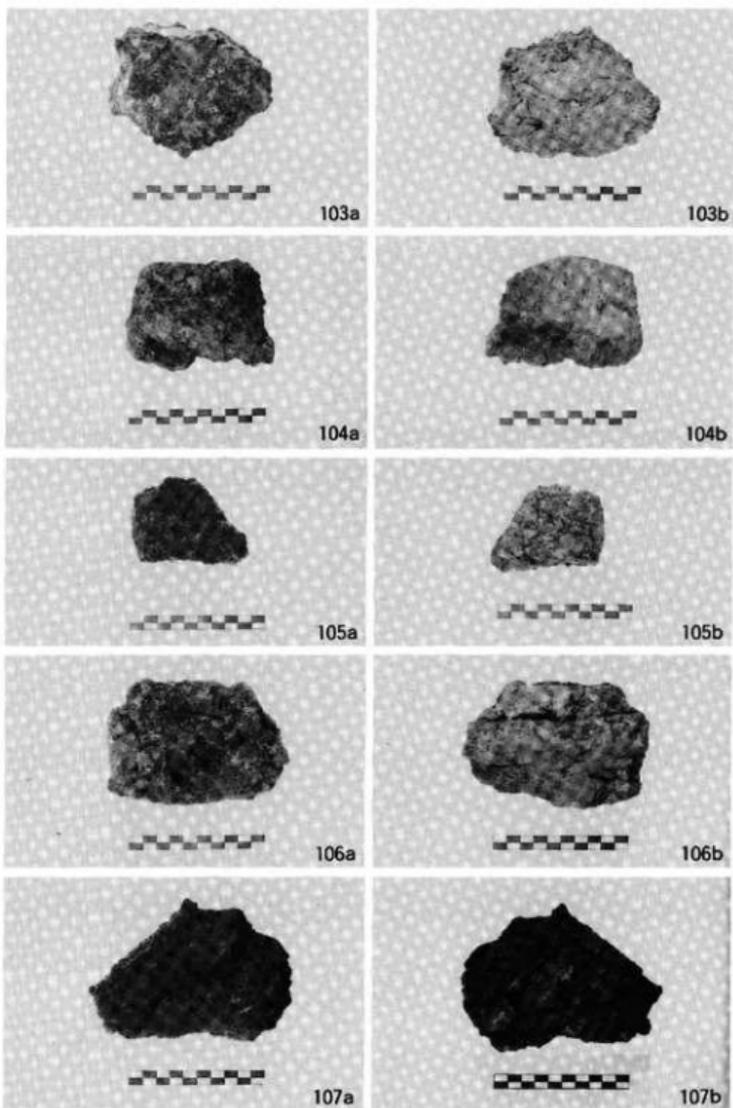


11=落ち込み-01
 12=SD-101
 13=P-01
 14、15=SK-01





神ノ木塚出土火打石



神ノ木塚土出土磁滓

大和郡山市文化財調査概要 31

神ノ木遺跡発掘調査概報
(付. 神ノ木塚発掘調査概要)

平成6年3月31日

- 編集** 大和郡山市教育委員会
大和郡山市北郡山町248-4
- 発行** 大和郡山市都市整備部
大和小泉駅前区画整理工事事務所
大和郡山市小林町170-2
- 印刷** 共同精版印刷株式会社
奈良市三条大路2丁目2番6号